



Whisky 党を魅了する  
Old parr

嶺井医院 泌尿器科  
嶺井 定一

最近の若い人は集って皆で酒を酌み交わすことが少なくなったと年輩者からよく聞く。そのことは私も実感をしている。

世の中に酒類が好きな人、嫌いな人、全く呑めない人がいるが、呑めない人にとっては酒の話は面白くなく迷惑かもしれない。呑もうと酔うと私の勝手と、一人酒の方が周囲を気にせず呑めるが、「一人で飲む酒、不味い酒」と歌の文句にもあるように酒は皆で呑む方が楽しい。何れにしろ酒好きにとっては花も嵐も踏み越えて呑めることが男の生き甲斐である。私は一人で呑むより皆揃って呑む酒宴が好きである。通常はあまり喋らないがアルコールが入れば陽気となり弁も爽やかに饒舌となるらしい。

酒類のブームは移り変わりが激しく、1990年代後半はWine、2000年代前半は焼酎、沖縄でも泡盛ブームで、更にChu-hi人気となり、最近では昔流行っていたHi-ballが一般に受けているようである。元々Hi-ballは英国式でWhiskyを炭酸で割ったものである。(Whisky Soda)。承知のとおりOn the rocksはWhiskyに氷を入れたもの、水割はWhiskyに水を加えたものである。通に言わせると水割はWhisky本来の味と香りが薄れてしまうと批判もあるが、しかし、これまでBrandyを水で割ったらAmericanと言われ、最近では氷を一杯詰め込んだ大ジョッキにRed Wineを注いだカチワリ・ワインと言う呑み方まで現れている。このような呑み方はArgentineでは以前より行われていたが、更に酸味の強いRed Wineを7-upで割って呑まれている。このような呑み方は戦後泡盛を7-upで割って呑んだ戦後移民が伝えたものと思われる。これは実に呑みやすく、

いくらでも呑めるが、翌朝は二日酔いをするのが欠点である。

若い頃はビール、日本酒等と何でも呑んでいたが、Wineは奥が深く中々見極めが難しく大変である。その点、Whiskyは自分の好みで気軽に呑めるので、現在はWhisky党で、呑み方は水割が主である。Wineはコルクを開けたら1本呑み干さねばいけないが、その点Whiskyは放置していても問題は無い。但し、長期間放置あるいは未開封のビン詰めでも蒸発して減ることがある。泡盛の甕も同様で、これを天使の呑み代と一般に言われている。

Whiskyは蒸留酒で穀物を原料として蒸留し、樽で熟成させたものである。ブドウの採れない寒いIrelandで、ビールを蒸留して強い酒を造っていたのがWhiskyの起源とされ、Uisge beathaと呼び、18世紀以後Whiskyと呼ばれるようになった。

Whiskyが最初に醸されたのがIrish (Ireland共和国、英連邦北Ireland自治州)で、次いでScotch (UNITED KINGDOMのBritan島北部)、American (Bourbon)、Canadian、Japaneseと次々に各国で醸造されるようになった。Irishはmildで、ScotchとBourbonは強い香りの個性があり、CanadianはLightであると言われている。

ScotchはMalt Wisky (大麦麦芽のみを使用し単式蒸留器で蒸留したもの)、Glen Whisky (トウモロコシ等を主原料として連続蒸留機で蒸留したもの)、Blended Whisky (Scotch、GlenをBlendedしたもの)に分けられる。Malt Wiskyの特にSingle Maltは一個所の蒸留所で醸造されたMaltのみをビン詰めにしたものでそれぞれ独特な香りがある。Blended Whiskyは歴史は浅く19世紀半ばの誕生で、Mildで口当たりがよく芳醇な味わいで今日よく呑まれている。私も好んでBlended Whiskyを飲用している。これまでRoyal Salute (21years)、Ballantine's (30years)等も好んで呑んでいた。

英国人でLondon在住の知人MICHAEL

RUNGEは英国人でありながらScotch Whiskyを呑めず、Wineを愛飲している変なEnglishmanであるが、彼の友人のScotch党の連中はScotlandで最も人気の高い銘柄であるThe famous grouse gold reserveを勧められ、呑むと確かに酷がありBalanceのとれたScotchであることが分かる。しかし、私は英国史上152歳の天寿を全うした人物THOMAS PARRが埋葬されているLondonのWestminster Abbeyを訪れ、跪き墓参をやりその後、Old parr Whiskyを愛飲するようになった。

「酒は天の美緑」という酒の旨さ、酔の心地のすばらしさを賛美する諺があるが、酒名が長生きしたTHOMAS PARRに由来するOld parr Whiskyは正しくその通りで、Peatの香りが素晴らしい深い味わいがある。その後、Canadian RockiesのAthabasca glacierの水河へ行き、そこの天然の水でOld parr500をOn the rocksにし、杯を挙げこのWhiskyとの出会いを神に感謝した。

友人のWine党のS君は、有名な女性作家、兼女優、テレビ・キャスター等の美女達とWineについて蘊蓄を傾けながら嗜んでいる。実に羨ましい限りで、一緒に仲間に入りたいが、今更Wine党に鞍替えすることはTHOMAS PARRに操を立てたからには申し訳がたたず、色々な誘惑に屈することなく、これからも頑なにOld parr Whisky党として志を代えないように幸せな日々を過ごしたいと思う。

我国においてもOld parr Whiskyは明治時代より多くの愛好家を持ち、政治家・岩倉具視、吉田茂元首相も愛好家として知られており肖りたいものである。

Old parr Whisky 飲みて琥珀色の夢路かな。



「緑の桜」へのこだわり

沖縄県立中部病院  
国島 睦意

緑の桜を知る人は少ない。かつて、私も知らない者の一人だった。

20年ほど前、仙台に行った際のある夜、小さな居酒屋へ入った。数人しか座れない程度の店で、おでんと日本酒を前に、仙台の行楽地を話題にしていた。

.....

「気仙沼まで行くと、緑の桜が見れるよ」

「えっ、そんな桜があるの」

.....

こうして緑の桜・御衣黄（ぎょいこう）の存在を知った。残念ながら、気仙沼を往復する時間がその時の私には無かったので、行けなかった。

いつか気仙沼に行きたいものだと思いつつも、それから十数年、行く機会を作れないでいた。

4年前の5月初旬、その機会がやっと訪れ、家内と東北の旅へ出るようになった。当然、気仙沼へ寄った。港から船に乗り、20分ちょっとで、前方に浮かぶ「大島」へ。そこに緑の桜が多らしい。なるほど、中学校の周りや公園、そこに行く途中の道路沿いに、桜の木がある。

残念ながら、時期が早かったらしく、まだ咲き始めであった。御衣黄は染井吉野が散った後に咲き始めるので、東北の5月初旬なら時期もよかろうと思ったが、駄目だった。嘆いても仕方がない。ぽつぽつと咲いている花を眺め、満開時を想像するしかなかった。





やる事もたまにあります。何年か前には70台でまわった事も夢の様で、最近スコアメイクに苦しみ、それを年のせいだといいわけしながらもゴルフを楽しんでいます。

さて、静の趣味の音楽鑑賞ですが、かなりマニアックで殆ど知名度のないグスタフ・マーラーという作曲家の交響曲をよく聴いています。その音楽の内容を人に伝える事はなかなか難しく、また能力もありません。あえて、ひとつ言うなら、ベートーベンの交響曲第5番で運命の扉を叩く、冒頭のフレーズは皆さんよくご存知だと思います。マーラーにもそのフレーズをアレンジした曲がありますが、高揚感はなく、むしろ淡々とした始まりです。それから喧噪と静寂の繰り返しの長い音楽です。色々な楽器を使い、音を重ねあわせ音楽用語ではいわゆるポリフォニーと呼ばれ、その躍動感がたまらなくはまっています。音楽は夜遅く聴くため、家を建てる時にオーディオルームをつくり大音量でも周囲に気兼ねなく聴いています。オーディオ機器にはこだわらず、高価な器機は持っていません。ソフト面にこだわり、LPレコード500数枚、CDは数え切れない程もっています。最近DVDを薄型TVで視聴しています。マーラーの交響曲の緩叙楽章には胸にせまるものや、癒し系の所があります。映画監督ヴィスコンティの作品にも使われ、初老の男性が浜辺で肘掛け椅子にすわり、遠い水平線を眺めながら晩年の境地をさまよう心象風景が描かれ、音楽は第5番の4楽章アダージェットが浪々と鳴り響き、印象的でした。交響曲の何曲かに合唱をとり入れ、第8番は千人の交響曲と呼ばれ、スケールが大きく、迫りに満ちています。東洋思想をとり入れた“大地の歌”もあり、土曜日の夜は酒を飲みながら全曲聴いたりしています。

マーラーにもバブル経済時期に一大ブームがあり、外国から様々なオーケストラが来日してコンサートが行われ、NHK・TV、FMラジオでよく視聴していました。

マスコミ、商業主義が先行して、バブル崩壊と共にブームも終焉を迎えました。マーラーは

大指揮者として有名でシーズンオフに湖畔近くの山小屋で作曲したが、当時は殆ど演奏されませんでした。50年後には自分の時代がくると周囲にうそぶいたそうです。ある書店で音楽雑誌を読んでいると、今年マーラー生誕150年と知りましたが、ショパン生誕200年の祭りの影に隠れて、殆どイベントはない有様で、やや寂しい感じです。

休みの日はできるだけマーラーの音楽を聴く様にしています。

この様にゴルフは月2回しながら、音楽も聴いて人生を楽しんでいる所です。



### 同姓同名

那覇西クリニックまかび  
玉城 信光

「ネ、ネ、聞いてくれる！！大変なことがあったの」家に帰るなり我が妻が興奮して話しかけてきたのです。

年金確認メールが妻に届いたのです。年金事務所に赴き記載されている職歴を確認したところ、事務職員曰く「あなたは19才頃大阪で働いていますね。その分を年金に追加しましょう」

「ちょっと待って。私は19才の時は学生で沖縄にいました。仕事はしていないのですが」

「おかしいですね。里見さんですよ。生年月日は昭和〇〇年〇月〇日ですよ」

「私はずっと沖縄にいるので外に里見という人がいるのですか。生年月日も同じですか」

「そうです。あなたでなければ同じ生年月日で同じ名前の人がもう一人大阪にいることになりますね」

これは大変なことです。妻は思いました。妻はときどき高島易断を見て自分の運勢を確かめていることがあるのです。生命判断は何年何月何日生まれで運勢を見ます。ちなみに妻は徳川

家康と同じ運勢をもっているのです。

妻は思ったようです。「同じ年の同じ日に生まれた人は同じ運命にあるはずだ」その上に名前まで同じであれば、姓名学的にも全くおなじ運命になるはずだと考えたのです。

妻はおばたちにつれられてときどき“サンジンソウ”や“ユタ”を訪ねることがあります。家族のことを訪ねても“サンジンソウ”や“ユタ”が言うことが違うので余り“サンジンソウ”や“ユタ”は当らないと思っているのですが運勢は信じることはあります。

あるとき東京の街角で占い師の前に座って見たのです。「あなたのご主人は料理人ですね、包丁さばきが上手だと出ていますよ」「うん、違うわけでもないな、メスさばきが上手だからね」と思ったのです。

年金事務所から帰るなり、インターネットの検索をはじめたのです。最近のインターネット社会は怖いものです。里見の検索をかけると出てきました。出てきました。『里見という人は私と同じ運命を生きているのだろうか？』しかし検索された里見は、どうも妻より若いようです。その他には誰も出てきません。本人も出てきません。本人さえも検索にかからないのはおかしいと思ったようです。しかし、それもそのはずです。その名前は『現在では使われていません！』でした。

私が帰るなり妻は興奮した様子で上記のことを話したのです。「本当にもう一人私と同じ運命をもっている人がいるのだろうか、会ってみたい。もし同じ運命を辿るのであれば占いを信じてもいい」と話すのです。

私はそっけなく「40年前の年金記録でしょう。社会保険事務所の人が里見の記録を右になぞっていったときにその下の里見×子の記録を間違えて登録しただけじゃないの。いい加減な社会保険事務所だからそれだけのことだろう」

つまらないことを言ってしまった。



子供（3～5歳？）の頃、親戚のお兄さんに連れられて映画見学に行きました。彼は中学生だったと思います。その時に初めて映画を見たのですが、それが「不思議の国のアリス」でした。日本での初上映が1953年だそうです。沖縄での上映が同時なのか1～2年遅れだったのか良くわかりません。再上映は1973年です。やはり初演のものを見たということになります。内容はまったく覚えていません。吹き替えではなく、字幕だったようで内容が把握できなかったと思います。この作品はディズニー作品にしては不評だったようです。

それから55年以上がたち「アリス イン ワンダーランド」が上映されました。しかも3Dです。初の3D作品「アバター」に興味はありませんでしたが「アリス イン ワンダーランド」は是非見てみたいと思いました。5月中旬の日曜日に見に出かけました。料金は千円＋指定席四百円＋3Dメガネ百円で合計千五百円でした。コーラとポップコーンを手に正面右側の席に座りました。

物語の粗筋は以下の通りです。19歳のアリスはガーデンパーティで求婚されます。アリスは返事をする代わりに白ウサギを追ってアンダーランドに落ちて行きました。落ちていく途中で白ウサギの投げた物が飛んでくるのですが、3D効果で実際に客席に飛んでくるようで首をすくめてしまいました。アリスは芋虫の予言の書によればアンダーランド（アリスにはワンダーランドと聞こえる）を支配する赤の女王からそこを開放する勇者として伝えられています。赤の女王は「愛されるよりも恐れられるほうがいい。」と言って、恐怖で人々を支配するマキアヴェッリ型の統治者です。「首をはねてしま




いなさい。」というのが彼女の口癖です。アリスはその赤の女王から追われる身ですが、マッドハッター、三月うさぎ、やまね、ブラッドハウンドに助けられ、白の女王に会うことができました。ヴォーパルの剣を手に入れジャバオッキーという恐竜の首を刎ねることで赤の女王の支配を終わらせました。赤の女王は恋人と思っていたハートのジャックからも手ひどい裏切りにあってしまいます。アリスはウサギ穴を出て自分の気持ちを求婚者に告げるのですが、彼女が選んだのは結婚ではなく仕事でした。

3Dの面白さは別にしてマッドハッターの帽子がクールでした。帽子には10/6という値札がついており10シリング6ペンスの値段であることを示しています。羽根飾りやピンがアクセントになっており素敵でした。三月ウサギの庭でお茶会がおこなわれているのですが、アリスがやってきた時、ジョニー・デップ扮するマッドハッターが細長いテーブルの上を沢山のティーカップ、ティーポットを越えてアリスを迎えに行く場面が印象的でした。キノコの上で水キセルを吸う芋虫はなんとなく麻薬中毒を思わせる雰囲気がありました。かわいらしかったのは妻と子供のいるブラッドハウンド犬で、赤の女王の恋人ハートのジャックからアリスの行方を追うように命令されていました。有名なチェシャ猫はニヤニヤ笑いが特徴で原作どおりのキャラクターでした。

アンダーランドは、発情期で行動が支離滅裂な三月ウサギ、水銀中毒?のマッドハッターや首切の好きな赤の女王がいるいかれた世界です。アリスは現実の世界から離れ自分の心の中(ワンダーランド)に入っていくことにより成長し、答え(何らかの解決策)を見つけることができました。

こんな感じで2時間弱の時を楽しみました。アリスが向き合わざるを得なかった現実の世界も、我々のものと同様に厳しいもので、なかなか自分の思うとおりにいくものではありません。現実の世界で悩んでいる方はアリスと共にいかれた世界に浸ってみるのも一興かと思います。



**私は乳がんオタクハルサー！！**  
宮良クリニック  
宮良 球一郎

ランプ生活だったから多分私が4~5歳の時だろう。小浜島の南東の端に赤瓦屋根の実家がある(小浜島: NHK ちゅらさんで名が知られるようになった竹富町内の小島)。その平屋の三番座と台所(と言っても土場だが)に繋がる板間のランプの下で眠気まなこをこすりながらじいーっと、慌ただしく動き回る祖母の姿を追っていた。

当時は水道がないので、雨水をためた甕(かめ)や井戸から水を汲んできて祖母は朝食の準備と昼の弁当作り。もちろん材料は自家製。家周囲の石垣や近くの畑で採れた野菜類。やがて東の空が少し明るくなって周りが見渡せるようになる。納屋や床下から鶏を追い立てて産みだたの卵を取ってくる。これが私の毎朝の日課。しばらくすると祖父も起きだし、着替えもそこそこにチューカーからお茶を一気に飲み干して牛をつなぎなおしに出かける。祖父が戻るのを待ってやっとならべて朝飯。そして馬車に乗ってゆったりと畑仕事へ。

50歳を超えた今でもあの情景がいつも鮮やかに思い出される。きっと私の原風景なのだろう。

外科医として10年を超えた頃、癌研究所で乳癌の魅力に取りつかれ帰郷。癌研時代の恩師の1人である坂元吾偉先生がいつも言っていた。「我々は本当にいつでもどこでも乳癌の話しかしない」。最初は半信半疑だったが本当にハマってしまった。いつも乳癌のイメージカラーである「ピンク」を身につけ、大げさだけど乳癌のことを考えるのが好きで好きでたまらない「乳がんオタク」になってしまった。その後、色々な先生のお世話になり、様々な経験を得た後、縁があり乳癌を専門とした城を持つこともできた。きっとこのまま乳癌に残りの人生の全



てを捧げるだろうと家族も周りもそして私自身も疑わなかった。

ところが今、早朝虫よけスプレーを全身に振りかけ、雨靴を履き作業道具一式を腰に巻きつけ庭や畑にでている。庭木の手入れ、プランターや地植えした野菜への水や肥料やり、そして雑草取りと汗だくになりながら出勤時間ぎりぎりまで精を出している。乳癌をおろそかにすることは全く無いが、遅く帰宅しても、ほろ酔い加減でも懐中電灯と割り箸を持って害虫退治を一日の最後の仕事としている自分がある。

???。一番驚いているのが妻だ。これまで14年間のアパートメントの生活で玄関周囲に義母が育てていた鉢植えの木々に全く興味を示さず、水やりもせず、自宅の草木と接するのは台風避難でエレベーターホールに移す時だけという情けなさだったから。

何故?きっかけは妻念願の家を建てたことだろう。

当然家は設計から内装まで全て妻担当。私は一切口出しも出来ず!?!に、与えられた担当は自然の流れで庭の管理に。庭とは名ばかりの荒地をみてさすがに今度は何もしないわけにはいなくなった。雑草だらけの庭にしたら家族皆から総すかんで食うことになるだろうからだ。私は乳がんオタクだ。それならば1年中必ずピンクの花があちこちで咲き、常に「乳がん」を意識できるような庭にしようと思いついた。

暇を見つけてはホームセンター通いをし、とにかくピンクの花を咲かせる花木を集め庭に、鉢に配した。おかげで今はピンクの薔薇とピンクの紫陽花が競うように咲いている。しかしこれで話が終わらなかった。ホームセンターに足繁く通ううちに島バナナ、島バンシルー、シークワァーサーがやたらと目についた。小浜島の実家庭は、四季を通じて様々な果実があったなあ。美味しかったなあ。私は原風景を思い出した。祖父母は農民だった。高校まで休みになると島に渡りキビ刈りの手伝いをしていた私にもすっかり農民の血が入っているのだ。自分の手で作物を育てる快感が甦ってしまった。

気付いたら実家に対抗心?を燃やし、裏庭に所狭しと沖縄県産果実を植えまくった。プランターにはトマト、ゴーヤー、キュウリなどビギナ一定番の野菜が。

土をいじりながら祖父母の私に対する愛情も再認識できた。太陽と雨のもたらす恵みに感謝し、四季の移り変わりに感動しながら、乳癌診療に精をだす自分を見出してしまった。

私の農民の血はとどまることを知らない。ついには畑を手に入れ、耕運機も購入し家庭菜園の枠を飛び越えてしまった。自然も愛する乳がんオタクハルサーとして新たな人生を歩みだした。



数種類の熱帯果実が林立する裏庭



自宅隣の実験畑





**波乗人**

南部徳洲会病院  
嘉数 朗

私の両親は相次いで病に倒れ、その後約6年間の闘病生活と介護に私は仕事の合間や時には休みをとって頑張り、その最後は兄弟家族全員で看取りました。それから一周忌の法事が一段落した頃から心に穴が開いたような虚無感に襲われると伴にそれまで抑えていた様々な感情が一気に湧き上がりました。そして「今まで全く考えもしなかったとんでもない事をしたい」と思いました。

車を改造してレースに出ようかなどと考えながらふと友人がサーフィンをしていることを思い出し電話しました「今スポーツ店にいるんだけどサーフィン始めるには何準備したらいい？」

もともとサーフィンには全く興味がなく、どうせ遊び人の道楽ぐらいにしか思ってなかったので、とりあえずやってみてつまらなかつたらやめようと考えていました。

ところが実際に海に入ってみるとサーフィンどころではなく、全く何一つできませんでした。波に乗ろうとしてもコケて巻かれて上も下も分らない状態でまるで洗濯機の中に放り込まれたように海中をグルグル回り続けるだけです。息苦しくてやっと海面に顔が出たと思ったらまた次の波が覆いかぶさってきてこのまま死んでしまうんじゃないかと思いました。

これにはショックを受けました。何にも出来ない自分が惨めで悔しくてその後も何度か海に行きましたが結果は同じでした。

どうして自分は波の上に立てないのだろう、もしかして一生立てないのでは？と挫折しかかりました。でも元々の負けず嫌いの性格もあり何度も海に通いました。

体力が無いからだろうとジムに通い、筋トレ

と水泳も始めました。

そして筋トレに明け暮れていたある日身体の小さな女性が軽々と波に乗っているのを見て愕然としました。なんであの子には出来て自分には出来ないのだろう？

サーフィンには筋力と体力はもちろん必要ですが、体のバランス感覚も重要でした。あっと言う間に崩れる波に、不安定なボードを浮かべてさらにその上に立って乗るためには重心を意識したバランスが取れないと出来ないのです。それからバランスボールやスケートボードの練習も始めました。こんな歳になってスケートボードするなんて想像もしなかったし、本当に恥ずかしかったです。「オッサンいい歳して何してるの？」という視線を感じながら練習しました。

そしてそうこうしている内になんとか波の上にボードで少し立てるようになりました。初めて自力でボードに立って海面をサーッと滑った瞬間のあの感動は今も忘れられません。

そして同時におじさんでも諦めずにやれば出来るだと密かに感動しました。

そんな時雑誌で衝撃的な記事を見つけました。ハワイに片腕の女子プロサーファーがいたのです。サーフィン中にサメに襲われ左腕を肩から失ったにも関わらず、その後もサーフィン続けプロになったレザリー・ハミルトンの話です。両腕あっても大変なサーフィンを片腕だけで、しかもプロサーファーになったなんて。いったいサーフィンってなんだろう、もはや単なる道楽とは思えません。

サーフィンの発祥は8世紀頃のハワイだと言われています。記録上は1778年キャプテンクックがハワイアンが板の上に立って波に乗るのを見て驚き、日誌に「こんなに珍しく難しい危険な操作が出来る大胆さは驚きに値する」と書き記したのが最初と言われています。古代ハワイでは王族も貧民も老若男女も皆がサーフィンを楽しみ、コンテストもよく開かれていたそうです。カメハメハ3世はサーフィンの名手だったそうです。しかし1821年ハワイを訪れたキリスト宣教師達が裸同然で男女が海で遊ぶこと

を不道徳として否定迫害してからそれから長い間サーフィンは衰退して行きました。その後20世紀初めにワイキキの白人観光客の注目を集めたことで再びサーフィンが復活したとされています。そして「近代サーフィンの父」と言われるデューク・カハナモクが登場します。サーフィンの名手でもある彼は1912年ストックホルムオリンピックに水泳のアメリカ代表として出場し100m自由形で世界記録を塗り替えて金メダルを取り、その後ハワイの親善大使として世界中を巡り、各地でサーフィンを披露し広めていきました。

今や世界中に大勢のサーファーがいます。人生全てがサーフィンの本物のサーファーから趣味程度の人まで様々です。中には何十メートルもある巨大波に乗る者、雪降る中極寒の波に乗る者、また世界中の素晴らしい波を求めながら旅をしているサーファーも沢山います。サーフィンをする人が増えるにつれ素行の悪い者も出現しサーフィンのイメージを悪くしていますが、ほとんどのサーファーは1年中波のことばかり考えている純粋でいい人ばかりです。

そんなサーフィンにこの夏に皆さんも挑戦してみてはいかがでしょうか？



**嬉しい若者の活躍**

嶺井リハビリ病院 内科  
澤岬 安教

緑陰（青葉の茂った木立ちのかげ）、8月号のタイトルに相応しい夏季語彙である。

表題の趣旨を汲みとった素敵なお話を文章に表現出来るような文才の無さを残念に思いつつ、原稿の依頼を頂いた4月初旬時点で気になっている事柄を気取らずに書き留めることでご容赦頂けるものと割り切ってキーボードを叩打する。

まずは先月の興南高校の第82回選抜高校野球大会の優勝が誇らしく、大いに力を頂いた。今年沖縄県代表が選抜初出場してから50年の節目の大会であったが、近年の県勢のレベル向上は周知のところであり、過去3年間での春夏大会通しての2回優勝と4強は全国随一であるとのこと。加えて野球技術だけでなく対外的な対応や態度にも落ち着きや好感が持てて、自分の高校生当時とはその時節の長さ以上の隔世の違いを感ぜずには居られない。

子供達の頑張り具合への感嘆と個人的な関心事項としてもう一点、3月は大学入試試験結果も非常に気になったことである。

学力試験というと全国学力試験が何かと話題になり、沖縄県の結果は思わしくない（平均評価で全国最低）との報道も普通にあり高校野球とは話が別ではと思われる方も多いのでは？しかし、所謂全国学習試験は正式には全国学力・学習状況調査と称し、その本質や行政や社会的取り扱い方もセンター試験（大学試験）とは異なるものである。

全国学力試験は1960年代に全国学力テストとして実施されていたが学校や地域の競争を煽るとの批判等で中止され、2007年にやはり様々な批判を受けながら43年振りに復活された試験（調査）である。日本全国（今年からは抽出校へ規模を縮小）の小中校の最高学年（小6、中3）全員が対象となる試験で、目的は調査であるので都道府県レベルでの結果（成績）は当たり前公表されている。

一方、センター試験（大学入試センター試験）は大学入試の一部となる全国統一の選抜試験であり、その結果が一般に公表されることは（諸種の問題により？）ない。こちらの始まりは1979年の共通一次試験（国公立共通一次試験）で、特徴としてマークシート形式やその名の如く当初は国公立大学入試に限定していた。これが1990年に現在の形式に変更され概ね30年も継続されている。

私は栄えある同入試の第一回現役受験生となるも実力不足で当然の如く浪人を強いられた



が、結果として琉球大学医学科一期生の肩書きをゲットした。

さてお話を本題に戻すと、センター試験結果を見ると沖縄県は近年は最下位ではないのである。最近の情報管理の理念や競争原理の煽動抑止配慮等のためか、正式に公表される事はまずないのだが折に触れて報道がされる事もある。数年前には都道府県別成績で30位の後半との報道も耳にした。今回ある程度の情報裏を確認すべくネット検索で自分なりに調査をした。サーフィンを駆使し粘り強く多数の関連情報を潜るもやはりヒット件数は少なく、2件程の有用結果しか入手出来なかったが、県勢の学力も緩やかではあるものの確実に向上している様子は読み取れた。本土大手予備校の資料ではあるが、1987年から1995年の9年間は47位と不動の最下位を維持も、内容的には800点満点で100点の差が50点まで縮小している。そして2008年の他社資料では全国平均点は下回るものの44位へ上昇している。全国学力試験で成績不良群が進学を断念し、相対的に成績良好群がセンター試験の母集団に限定された可能性が考えられ、沖縄県全体の学力向上を反映するものではないものの大学入試レベルでの成績の向上は結果通りである。これを査証する報道として、本年の県内県立高校からの全国国公立大学への現役合格者は初めて千名を超えたそうである。有力私立高校や浪人生も合わせるとかなりの大学合格数になるのでは？

普天間飛行場移転問題で緑陰ではなく何かと気分も鬱々とした時期でもあるが、其処彼処に沖縄の未来の光明はあるのではという気にさせてくれる若者の活躍に感謝と賛辞を送り拙い稿を終えたい。



“緑陰随筆”

南部徳洲会病院 泌尿器科  
向山 秀樹

自分は19歳で琉球大学に入学し、医師免許を取得してから、かれこれ20年を迎えようとしています。この間、沖縄をベースとしながら、いくつかの他府県での病院勤務、見学。また両親の病気に伴い、患者側の立場で都会での医療を経験しました。これらの体験から沖縄の医療について、この場をかりて簡単に述べてもよいでしょうか。ひとことでいえば、

“沖縄医療レベルは高い。”

他県に関する印象ですが、県庁所在地を含めて街自体も那覇は他の県に比べて都会的で人口も多いと思いませんか。特に若い世代の人間が多い。つまり活気がある。(ただ沖縄の年を重ねた人々にも他の県に比べて活気があるとは思いますが。)

この若い世代を背景にして、才能のある人たちが生まれている。才能のある人間が生まれる確率というのはほぼ、人口に比例すると思います。だからこのことはとりわけ沖縄がすごいということになるとは思えません。問題はその後で、才能のある人たちが医学部を卒業して医師になったときに、どこで仕事をするかということにあるのではと思うのです。どうも他県ではこれら才能のある人たちが医学部を卒業して医師となったときに、地元に残るひとがすくなく、都会での研修を選択してしまう。研修をする場所が都会であることは、まだ良いと思うのですが、そのあと生まれ育った地元に戻ってこない先生方が多い気がします。

ところが沖縄の場合はいったん沖縄県外に出ても、沖縄に戻ってくるかたが多いのではないのでしょうか。これが医療技術の沖縄県へ導入、つまり沖縄の医療レベルの向上に繋がっていると感じます。

患者の立場にたってみれば、どんなに最先端の医療を導入したとしても、それを誰がどれだけ享受できるのかも問題です。経済的に豊かな人だけが医療を受けられるのでは、日本医師会長であった武見太郎先生が導入した日本皆保険、世界に誇る日本の医療の素晴らしさが台無しです。個人の経済力と医療サービスがほぼ平行していたアメリカ合衆国でさえ、一部の州では小児の医療は安くなり、今度は医療保険制度の見直しがされてきているというのに、日本が世界の流れに逆行してもしかたがない。国民の健康があってこそ国家の繁栄があるはずなのに。

沖縄県の場合、確かに最新治療の数などは、都会に比べれば少ないでしょうし、先端医療の数も少ないでしょう。ただこれらの治療の恩恵をこうむれる患者の数はどのくらいいるのでしょうか。県民全体の健康維持のためには、地域に根差した幅広い医療が必要なはずです。沖縄の人たちの健康が維持できているのは、もちろん沖縄の人たちの食事であったり、環境ホルモン等を含めたストレスが少ないということであったりもすると思うのですが、それだけではなく、沖縄の健康を支えている医療従事者、その医療従事者を戦後から下支えしてきた県立中部病院とそのOBさらに若い医師を育てている宮城先生を始めとする臨床研修病院郡プロジェクト群星沖縄に参加している病院と指導されている医師達。加えて地道に最前線臨床を行っている一般開業医・一般病院の勤務医、このような沖縄の医療スタッフが沖縄の医療レベルを維持していると思う今日この頃なのです。

多くの沖縄県民はおそらく、実感はされていないと思うのですが、この医療レベルを享受できる沖縄県民は、ある意味幸せなのではないでしょうか。この幸せを維持、向上させることが私の使命であると感じています。ちなみにこの文章はあくまで随筆でデータ等による裏付けはありませんのであしからず。ただ、あなたが間違っていないと思うのですが、いかがでしょうか。



ラナンニム  
北部地区医師会病院 内科  
山内 桃子

「ラナンニム！」と言われても、何の事だかわかる方はほとんどいないと思いますが・・・(もしいらっしゃったら、是非私までご連絡ください)。これは、ミクロネシア連邦チューク州の言葉で、「こんにちは」という意味です。ごあいさつが遅れましたが、私は琉球大学第一内科所属、4月から北部地区医師会病院で呼吸器内科医として勤務している、山内桃子といいます。

原稿を依頼されたとき、なぜ私が・・・?と思いましたが、最近は色々な経歴の方がおられるのでそうでもなくなっているのでしょうか、私の一風変わった経歴について書くようにとの思召しなのであろうと勝手に解釈し、書かせていただくことにしました。

先ほど、ミクロネシア連邦と書きましたが、琉球大学医学部に入学する前は、青年海外協力を参加し、2年間、同国チューク州の高校生に日本語を教えていました(なぜ、日本語かについては長くなるので割愛させていただきます)。

ミクロネシア連邦は、日本の南に位置し、ポンペイ、チューク、ヤップ、コスラエ州の4州からなる小さな島々の集まりで、それぞれの州で異なる言語を使用しているため、共通語は英語です。第2次大戦までは日本が支配していたので、病院、看護婦といった単語も現地語で使われているし、金太郎さんや桃太郎さん、と言った名前のおじいさんにもよく会いました。ちなみに、当時、チューク州はトラック諸島と呼ばれていました。

チューク州の人々は気性が荒く、島同士の抗争が今でもある、うんぬんという話は赴任前からよく聞いていました。チューク州に赴任する前に首都のポンペイで研修を行った際には、某国

へ赴任した同期は早速バンを乗っ取られ強盗にあったなどという話も聞き、また、チューク州に着いた当日は夜で周りも真っ暗であったこともあり人々の顔は闇に溶け込んでいるし、通りすがりの人たちが何かたくらんでいるようにしか見え、びくびくしながら相乗りタクシーに乗り、隊員連絡所まで行きました。翌日、晴れた天気の下で会った彼らはみんなフレンドリーで、ほっと一安心したのを今でも覚えています。

赴任して1週間位経った頃、近所の中学校の運動会（トラック&フィールド）があるから見に行こう、と同僚に誘われ、見学することになりました。

そこで見た光景は、私のこれまでの日本での常識を覆すものでした。用意ドンで競争が始まり、周りの生徒たちが応援する中、選手が一生懸命走っている・・・場面までは同じでしたが、途中で、後ろを走る選手たちがどんどんあきらめて当然のように応援席に戻っていくところを見た時の衝撃。なんという、根性無しなんだ・・・しかも、ここではこれが普通なんだ・・・と、啞然としました。その後、徐々にそこでの暮らしに慣れるにつれ、確かに、こんなに暑いところで何のメリットもないのに最後まで走ったらエネルギーの無駄、悪くすると体を壊すかも知れないと（なんとか）納得することもできるようになりました。

ミクロネシアの人たちは、体格もよく、私が高校生を教えていても子供が大人を教えているような図でしたが、体格の割に子供っぽく、人

懐こくて、ただし飽きっぽくて、いかに授業を楽しくするかに頭を悩ませました。

そんな私がなぜ医師になろうと思ったか。そのきっかけも、ここでの生活でした。

ある日、隣人の中国人医師と一緒のタクシーに乗り合わせた時のことでした。その医師が、タクシーの運転手さんに自分の妻が大変世話になったと感謝されている場面を見て、「いいな、私はこんなに感謝されたことないな。」と少しうらやましくなりました。

その時はそれで終わっていましたが、その後、帰国も間近になって自分の将来について考えた時、自分は教育よりも“癒す”仕事がしたいと思いました。そうだ、東洋医学を勉強して、漢方や鍼灸を勉強しよう！と決心して帰国し、早速、その方面で仕事をしている先生に相談したところ、「何をやるにしても医師の免許があって損はないよ。」とアドバイスをいただきました。よく結婚は勢いが大切といいますが、このときも、勢い以外の何物でもなかったと思います。よし、医学部を受験しよう！と決意し、早速予備校に通い始めました。幸い、琉球大学で拾っていただき、無事に医師になることができ、本当に私はラッキーでした。

またいつか、チュークを訪れたらどうなっているでしょうか、少しも変わっていないかもしれないし、ここはどこなの！？という位変わっているかもしれないし、少し楽しみです。もし、チュークに行ってきたよという方がいらっしゃったら是非様子を教えてください。

